自己に対する受容的認知のあり方から見た 自己愛と自尊心の相違性¹

川崎 直樹² 北翔大学 小玉 正博 筑波大学

Differentiating narcissism and self-esteem: Comparison of their relationship with self-acceptance

Naoki Kawasaki (Hokusho University) and Masahiro Kodama (University of Tsukuba)

This study examined the common and different factors of self-esteem, narcissism, and social phobia from the perspective of self-acceptance. Japanese undergraduates ($N = 267$) completed a questionnaire that assessed narcissism, social phobic tendency, self-esteem, and self-acceptance. Three aspects of self-acceptance were measured: definite evaluation of self-features, self-acceptance for each features of the self, and subjective estimation of their own self-acceptance evaluations by others. The results showed that definite evaluation and self-acceptance evaluations were related positively to narcissism and self-esteem. However, the relation between narcissism and self-acceptance evaluations was not significant when controlled for the effect of definite evaluation of self-features. In addition, social phobic tendency was negatively related to definite evaluation and self-acceptance evaluations. These results implied that self-acceptance evaluation was an important factor that explains the common and different factors of self-esteem, narcissism, and social phobia.

Key words: narcissism, self-esteem, self-acceptance, social acceptance, social phobia.

The Japanese Journal of Psychology
2010, Vol. 80, No. 6, pp. 527-532

近年，“自己愛”という概念が注目を集め、暴力や犯罪（大淵，2003），社会的ひきこもり（北西，2001）といった社会的問題との関連が議論されるなど，心理学的研究テーマとしての重要性が高まっている。

しかし，自己愛を研究する上でしばしば問題となるのが，自尊心との概念的な重複性である（Brown & Zeigler-Hill, 2004; Campbell, Rudich, & Sedikides, 2002）。双方とも自己に対する肯定的評価を中心とする概念であり（Campbell et al., 2002），ほぼ同義の用語として混同されることも少なくない（Pulver, 1970）。また自己愛を測定する代表的な尺度である自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory：以下，NPI とする；

Raskin & Hall, 1979）と，自尊心を測定する尺度とが一貫して有意な正の相関を示す（Brown & Zeigler-Hill, 2004; Campbell et al., 2002）ことも両概念の区別を難しくしている。

自己愛と自尊心の概念的相違点

現在，自己愛の測定に広く使われている NPI は，DSM-III（American Psychiatric Association, 1980）における自己愛人格障害の診断基準を元にしており，誇大な自己像を維持するために他者からの賞賛や注目を求め，自己中心的・自己顕示的な行動を取るという一連の内的・行動的特徴を表している。自己愛的な者が有する自己への肯定的評価は，主に他者に対して優越性や有能性を顕示・誇張することで防衛的に維持されるものである（Raskin, Novacek, & Hogan, 1991）。それはまた，課題の失敗など自己を否定するような状況によって容易に脅かされ，感情的な動揺や自己制御の崩壊をきたすという点で脆弱性をはらんでいるとも言われる（Morf & Rhodewalt, 2001）。

一方，自尊心の代表的な定義を提起している Rosenberg（1965）によれば，自尊心の中核的要素は，自分がどのような者であろうと自己に対して“十分に

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoki Kawasaki, Department of Psychology for Human Services, Hokusho University, Bunkyo-dai, Ebetsu 069-8511, Japan (e-mail: kawasaki@hokusho-u.ac.jp)

¹ 本研究は第 1 著者が筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した博士論文の一部を再分析し構成し直したものである。なお再分析を行う前の内容の一部は，日本心理学会第 68 回大会及び the 2nd Asian Congress of Health Psychology において報告された。

² 本研究の計画及び実施にあたり，貴重なご助言を頂いた杉江征准教授（筑波大学）に感謝申し上げます。

よい (good enough)”という尊重の感覚を持つことであり、他者との比較などによって得られる“とてもよい (very good)”という感覚とは異なるとされる。つまり自尊心は、優越性や有能性の有無に関わらない、自己に対する受容的で肯定的な評価が含まれる概念 (Rosenberg, 1965) として理解されるのである。対照的に自己愛は、他者に対する優越性や有能性に主に依拠しており、自己のよい面を誇張ないし錯覚することで保たれているとされる (Morf & Rhodewalt, 2001; Ronningstam, 2005)。つまり自己愛には、自己全体への受容的な評価は必ずしも含まれないと考えられ、ここに両者の相違点があると言える。

こうした相違点は、上田 (1996) によって提起された“自己受容”の概念的枠組みによって整理できる。上田 (1996) は、Rogers (1949) の理論などを元に自己受容の概念構造を検討し、自己に対する具体的な評価と、自己に対するメタレベルでの受容的な評価とを区別して定義している。そして、否定的に評価されるような具体的特徴 (例: “人づきあいが悪い”) を含んだ自己に対しても、メタレベルでの受容的で肯定的な認知 (例: “それでいい”) を持つことこそ自己受容であるとしている。

上田 (1996) の枠組みに基づき、優越性や有能性に関わる社会的に望ましい具体的特徴の有無についての評価 (以下、具体的評価とする) と、そうした特徴の有無とは別次元での自己全体への受容的・肯定的認知 (以下、受容的認知とする) を区別することで、自己愛と自尊心の相違性を明示できる。すなわち、他者への優越性や有能性の顕示を特徴とする自己愛は主に具体的評価の高さとは関連するが、受容的認知とは直接的には関連しないと考えられる。一方自尊心は、具体的評価だけではなく受容的認知とも関連すると考えられるのである。

なおここまで述べてきた“受容”の概念は、主に自己による自己に対する受容のことを指している。一方、“他者による受容”もまた、自尊心 (Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995) や自己受容 (Rogers, 1961) の基盤となる重要な要因であることが指摘されている。つまり、自己がどのような具体的特徴を有していようと、他者からの受容が知覚されること自体が、自尊心を高め、また自己受容も高めると考えられるのである。

しかし、自己愛的な者は、自己の優越性のみを重視するあまり、他者との親密で互恵的な関係を軽視する傾向があると指摘されている (Morf & Rhodewalt, 2001)。したがって、他者からの受容は自尊心とは関連を示すが、自己愛には直接的には関連しないと考えられるのである。

そこで本研究では、自己による受容的認知 (以下、自己による受容とする) と並行して、他者からの受容

の程度の主観的認知 (以下、他者による受容とする) についても測定し、自己愛及び自尊心との関連を検討することを第 1 の目的とする。

自己愛と対人恐怖の理論的関連

ところで、ここまで述べてきた“自己愛”の概念は、NPI に基づいた誇大で自己中心的な特徴を表したものであった。しかし臨床的理論の中での自己愛概念は、より広義の捉え方をされることが多く、自己愛の問題が対人恐怖やシャイ傾向としても表れうることが指摘されている (鍋田, 1997; 岡野, 1998; Ronningstam, 2005)。しかしながら、本研究で扱うような誇大で自己顕示的な自己愛の傾向と、過敏で自己抑制的な対人恐怖的な傾向とでは、表面的な特徴は対照的であり (岡野, 1998)、両者の共通点や類似点についてはいまだ十分な検討はなされていない。

本研究では、自己愛と受容的認知との関連の検討を試みているが、臨床的理論の中では、自己愛人格障害においても (Ronningstam, 2005)、対人恐怖においても (鍋田, 1997; 岡野, 1998)、自己の望ましくない特徴を否認したり嫌悪したりする傾向があることが指摘されている。このことは、自己全体を“それでいい”と見なす受容的認知が、自己愛においても対人恐怖においても見られにくいことを示唆していると考えられる。

そこで本研究では、自己愛と対人恐怖の共通点や相違点について、受容的認知の視点から検討を行うこととする。特に、自尊心の結果との比較によって、自己愛と対人恐怖に共通する特徴が見られるかどうか、検討することを第 2 の目的とする。

方 法

調査時期

2003 年 9 月上旬に調査を実施した。

調査の手続きと対象

大学での講義時間後に質問紙への回答を依頼し、一斉配布・回収した。調査対象は、茨城県内の国立大学の学生 267 名 (男性 92 名, 女性 175 名) で、平均年齢は 19.75 歳 ($SD=1.27$) であった。

調査内容

3 種の自己認知 上田 (1996) の手法を参考にし、下記のように、自己が肯定的な特徴を有しているかどうかの具体的評価 (以下、具体的評価とする) と、自己及び他者によるメタレベルでの受容的認知とを区別して測定した。(a) 具体的評価については山本・松井・山成 (1982) の自己認知の諸側面尺度を参考に、“人づきあいが広い”、“もの知りである”など人間の

Table 1
各自己認知における項目ごとの評定値の平均値・標準偏差・主成分負荷量 ($N=267$)

項目	具体的評価			自己による受容			他者による受容		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	主成分負荷量	<i>M</i>	<i>SD</i>	主成分負荷量	<i>M</i>	<i>SD</i>	主成分負荷量
1 人づきあいの多い	2.36	0.76	.44	3.25	1.34	.53	3.48	1.11	.62
3 思いやりのある	2.77	0.68	.60	3.58	1.33	.64	3.53	1.12	.66
4 顔が整っている	2.16	0.74	.69	3.25	1.18	.77	3.50	0.92	.72
5 もの知りな	2.22	0.78	.43	2.89	1.33	.63	3.35	0.94	.62
6 人に対して優しい	2.76	0.71	.65	3.58	1.26	.65	3.59	1.05	.67
7 人づきあいが上手い	2.26	0.75	.62	2.75	1.35	.66	3.21	1.06	.67
8 頭の回転がよい	2.38	0.84	.60	3.07	1.36	.60	3.33	0.99	.67
9 外見の良い	2.07	0.72	.71	3.18	1.16	.76	3.41	0.90	.74

肯定的特徴を具体的に表した 10 項目を設定した。各項目に自分がどの程度当てはまるかを尋ね、“まったくあてはまらない (1 点)”, “どちらかというにあてはまる (2 点)”, “どちらかというにあてはまらない (3 点)”, “とてもよくあてはまる (4 点)” の 4 件法で回答を求めた。(b) 自己による受容については上田 (1996) の手法を参考に、具体的評価で回答した 10 項目それぞれについて、さらに“そのような自分を自分はどう思っているか”を、“それではダメだ (1 点)”, “どちらかというとそれではダメだ (2 点)”, “どちらでもない (3 点)”, “どちらかというとそれでいい (4 点)”, “それでいい (5 点)” の 5 件法で尋ねた。(c) 他者による受容については同じく具体的評価で回答した 10 項目それぞれについて、“そのような自分を友人はどう思っていると思うか”を、自己による受容と同様の選択肢による 5 件法で尋ねた。

対人恐怖傾向 堀井・小川 (1997) の対人恐怖心性尺度を用いた。この尺度は対人恐怖的な悩みを表す 30 項目 (例: “他人が自分をどのように思っているのかととても不安になる”) などからなる。“全然あてはまらない (1 点)” から “非常にあてはまる (7 点)” の 7 件法で回答を求めた。

自己愛傾向 Raskin & Hall (1979) の NPI を基に作成された小塩 (1998) の自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) を用いた。この尺度は 30 項目 (例: “私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う”) からなる。“まったくあてはまらない (1 点)” から “とてもよくあてはまる (5 点)” の 5 件法で回答を求めた。

自尊心 Rosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した自尊感情尺度から、先行研究 (佐久間・無藤, 2003) にならって項目 8 を除いた 9 項目 (例: “少なくとも人並みには、価値のある人間である”) を用いた。“あてはまらない (1 点)” から “あてはまる (5 点)” の 5 件法で回答を求めた。

結 果

自己認知の 3 指標の検討

自己認知 10 項目に対する 3 種の評定全ての平均値と標準偏差を確認したところ、著しい分布の偏りを示す項目は見られなかった。そこでまず具体的評価の 10 項目の評定について、1 次元性を確認するため主成分分析を行った。その結果、項目 2 (“個性的な生き方をしている”) 及び項目 10 (“自分らしく生きている”) の第 1 主成分への負荷量が .30 に満たない値を示した。そこでこの 2 項目を除外した上で再度主成分分析を行ったところ、全 8 項目において .40 以上の負荷量が第 1 主成分に対して示され、1 次元性が確認された。そのため、この 8 項目の合計を具体的評価の指標とした (Table 1)。なお自己による受容、他者による受容の指標にもこの 8 項目を用いることとし、それぞれ主成分分析を行ったところ、いずれの分析でも全項目 .50 以上の負荷量が第 1 主成分に対して示された (Table 1)。このことから、自己及び他者による受容いずれにおいても、1 次元性が確認された。

各自己認知指標の記述統計量と相互の関連

具体的評価、自己による受容、他者による受容それぞれの合計得点を算出し、平均値、標準偏差、Cronbach の α 係数を Table 2 に示した³。またこれら 3 種の自己認知指標相互の相関係数も算出し、併せて記載した。相関係数の値からは 3 指標が相互に正の共変関係にあることが示された。

³ なお、性別による得点差について検討したところ、具体的評価、自己による受容、自己愛において男性の方が有意に高かった ($t(265) = 2.67, p < .01$; $t(265) = 2.27, p < .05$, $t(265) = 3.04, p < .01$)。これを受けて以降の各分析で男女間の係数の比較を行ったが、有意な差は見られなかった。そのため、本研究では男女全体での分析結果のみ扱うこととした。

Table 2
各変数の基礎統計量と相関係数 ($N = 267$)

	M	SD	α	相関係数				
				1	2	3	4	5
1 具体的評価	19.00	3.55	.74	—				
2 自己による受容	25.55	6.74	.81	.59**	—			
3 他者による受容	27.40	5.43	.82	.51**	.56**	—		
4 自己愛傾向	89.94	15.53	.90	.68**	.38**	.39**	—	
5 自尊心	28.78	6.57	.85	.54**	.51**	.44**	.51**	—
6 対人恐怖傾向	110.78	29.86	.94	-.45**	-.44**	-.32**	-.32**	-.68**

** $p < .01$

Table 3
具体的評価を統制した受容的認知と各傾向との関連
($N = 267$)

	偏相関係数	
	自己による受容	他者による受容
自己愛傾向	.02	.09
自尊心	.28**	.23**
対人恐怖傾向	-.24**	-.14*

** $p < .01$, * $p < .05$

自己認知と各変数の関連

自尊心、自己愛傾向、対人恐怖傾向の各尺度についても合計点を算出し、具体的評価、自己による受容、他者による受容の得点との相関係数を算出した (Table 2)。その結果、自己愛傾向と自尊心は、全ての自己認知指標と正の関連を示した。また、対人恐怖傾向は全ての自己認知指標と負の関連を示した。

この結果からは、自己愛傾向が高いほど、自己及び他者による受容が高い傾向にあることが示唆されている。しかしながらこの結果には、自己及び他者による受容と具体的評価との間の正の相関関係が影響している可能性が考えられる。そこで、具体的評価を統制した偏相関係数を算出した (Table 3)。

その結果、自尊心では、自己及び他者による受容との関連が示された。自尊心と自己及び他者による受容との関連は、具体的評価の高さによって説明されない部分があることが確認された。対照的に、自己愛傾向は具体的評価が統制されたことで、自己による受容とも他者による受容とも無関連となった。自己及び他者による受容の高さと自己愛傾向との関連は、具体的評価の高さによって説明されるものであることが明らかとなった。対人恐怖傾向については、具体的評価を統制することで係数の絶対値が若干低下したものの、依然として有意な負の関連が示された。対人恐怖と自己

及び他者による受容との間には、直接的な負の関連があることが示された。

仮説的パスモデルの検討

以上の検討を踏まえ、3種の自己認知と各変数との関連を、パスモデルとして仮説的に整理して検討することとした。まず、望ましい具体的特徴を持っているほど、自己を“それでよい”と思いやすいと考えられるため、“具体的評価が高いほど、自己による受容が高まる”というパスを仮定した。また、同じく自己が望ましい特徴を持っているほど、他者から受容されているという認識を持ちやすと考えられるため、“具体的評価が高いほど、他者による受容も高まる”とのパスを仮定した。さらに、他者による受容が自己による受容をもたらす (Rogers, 1961) と考えられるため、“他者からの受容が高いほど、自己による受容が高まる”とのパスを想定した。そして、“これら三つの自己認知が、自尊心、自己愛傾向、対人恐怖傾向に影響する”と仮定した。なお自尊心、自己愛傾向、対人恐怖傾向の間には相関関係を仮定した。

上記のモデルを元に1度目の分析を行い、その結果有意でなかったパスと相関関係を削除した。新たなモデルで2度目の分析を行い、そこで有意でなかったパスをさらに削除して分析を行った。その結果、最終的に Figure 1 で示したモデルが得られた。図中にあるとおり、適合度は十分な値を示した。

最終的なモデルでは、自尊心に対して具体的評価及び自己による受容からのパスが有意であり、いずれも正の影響が示されていた。自尊心は、具体的評価の高さと自己による受容的認知の双方に主に支えられていることが示唆された。また、他者からの受容も自己による受容を介して自尊心に正の影響を及ぼしていることが示された。自己愛傾向に対しては、具体的評価からのパスのみが有意な正の影響を示し、自己及び他者による受容は影響しなかった。自己愛は、具体的評価によってのみ支えられていることが示唆された。対人恐怖傾向に対しては、具体的評価及び自己による受容

からのパスが有意であり、いずれも負の影響が示された。具体的評価の低さに加え、自己による受容の乏しさも対人恐怖傾向に寄与していることが示唆された。

考 察

自己愛と自尊心の比較

まず自尊心については、単相関・偏相関いずれにおいても、自己による受容、他者による受容と有意な関連が示された。特に具体的評価の影響を統制しても受容的認知との関連が見られたことから、自己が望ましい特徴を有しているかどうかに関わらず、自己に対して受容的・肯定的な認知を持てることが自尊心を支えていると考えられる。他者に関しても、自己が望ましい特徴を有しているか否かに関わらず、自身を受容してくれる存在として認知できていることが、自尊心を支えていると考えられる。パス解析においては、具体的評価と自己による受容からの直接的影響が見られ、他者からの受容は自己による受容を媒介して自尊心を高めることが示された。これらのことから、“自己が望ましい特徴を持っているかどうか”、“そうした自己を自己が受容しているかどうか”、“そうした自己を他者から受容されていると認識しているかどうか”の3種の自己認知過程が、それぞれに自尊心を支える効果を持っていると考えられる。このように基盤が多様であることも、自尊心の特徴の一つと考えられる。

自己愛傾向については、単相関分析では自己及び他者による受容との間に正の関連が見られた。しかし偏相関分析およびパス解析において具体的評価の影響が統制されると、その関連は失われた。このことから、

自己愛傾向の高い者は自己全体に対して“それでよい”という受容的・肯定的な認知を有してはいるものの、それは自己が望ましい具体的特徴を有していることを前提条件としていっていると考えられる。つまり、自己が望ましい特徴を持つ限り自己を肯定的に受容するという“条件的な受容”であると考えられる。また、偏相関分析において、他者からの受容との関連が見られなかった。このことも、当初の予測に一致した結果であり、自己が望ましい特徴を持っているかどうかが重視され、他者から見た自己のあり方が相対的に軽視されがちであることを反映していると考えられる。パス解析の結果からも明らかであるように、自己愛は自己が望ましい特徴を有しているという具体的評価のみに支えられており、その基盤が一元的であることが特徴であると考えられる。

対人恐怖と自己愛の共通性

対人恐怖傾向については、いずれの自己認知とも負の関連が示され、自己愛とは全体的に対照的な結果を示した。自己愛が積極的な自己顕示や自己高揚を特徴とすること（Raskin et al., 1991）に比して、対人恐怖は自己抑制や自己卑下を特徴とすること（鍋田, 1997; 岡野, 1998）からもこの結果は妥当と考えられる。

ただし、上述のように自己愛と受容的認知の関連は、具体的評価を統制すると失われるものであり、条件的な受容が自己愛の特徴であることが示唆されている。そして対人恐怖においては、受容的認知は具体的評価の統制の有無に関わらず負の関連を示していた。この結果を大きく捉えるならば、“ありのままの自己

** $p < .01$

$\chi^2(5) = 7.660(p = .176)$, $GFI = .990$, $AGFI = .959$, $RMSEA = .045$

Figure 1. 具体的評価と受容的認知の影響過程

全体への受容的な認知を必ずしも有してはいない”という点で、両者が共通していると考えられる。

自己愛的な者は、自己を受け容れるに値する存在とするために、社会的に望ましい具体的特徴を積極的に誇張・顕示していく方略をとり、それが誇大性として表れていると考えられる。また、対人恐怖的な者は、社会的な望ましさがなく受け容れがたい存在である自己が、できるかぎり他者に露見することを避けているため、対人的な過敏性や抑制的行動が表れているとも考えられる。こうした点が、自己愛と対人恐怖の双方を含めた広義の“自己愛”の問題の一要因である可能性が考えられよう。

ただし、以上のような解釈は一つの可能性であり、その妥当性については、さらなる検討が必要と考えられる。特に、本研究では受容的な認知が自己愛傾向などを規定するというモデルを仮定しているが、こうした仮説モデルの検討には、縦断的な視点を含んだ検討が今後不可欠であろう。また、他者からの受容の測定法も、主観的評価ではなく、実際の他者からの評価などを変数として組み入れる検討などが必要と考えられる。こうした点をふまえて自己愛を多面的に検討し、実証的知見を蓄積することが大きな課題であろう。

引用文献

- American Psychiatric Association. (1980). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*. 3rd ed. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- Brown, R. P., & Zeigler-Hill, V. (2004). Narcissism and the non-equivalence of self-esteem measures: A matter of dominance? *Journal of Research in Personality*, **38**, 585-592.
- Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views: Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 358-368.
- 堀井 俊章・小川 捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- (Horii, T., & Ogawa, K. (1997). The construction of the scale for the measurement of anthropophobic tendency (Second Report). *Psychological Report of Sophia University*, **21**, 43-51.)
- 北西 憲二 (2001). 我執の病理 白揚社 (Kitanishi, K.)
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, **12**, 177-196.
- 鍋田 恭孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖——“他者を恐れ・自らを嫌悪する病”の心理と病理—— 金剛出版 (Nabeta, T.)
- 大淵 憲一 (2003). 満たされない自己愛——現代人の心理と葛藤—— 筑摩書房 (Ohbuchi, K.)
- 岡野 憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで—— 岩崎学術出版社 (Okano, K.)
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- (Oshio, A. (1998). Relationship among narcissistic personality, self-esteem, and, friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 280-290.)
- Pulver, S. E. (1970). Narcissism: The term and the concept. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-341.
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. (1991). Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, **59**, 19-38.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Rogers, C. R. (1949). A coordinated research in psychotherapy. A nonobjective introduction. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 149-153.
- Rogers, C. R. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identifying and Understanding the Narcissistic Personality*. New York: Oxford University Press.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐久間 路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- (Sakuma, M., & Muto, T. (2003). Variability in the relational self and self-esteem: College students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **51**, 33-42.)
- 上田 琢哉 (1996). 自己受容概念の再検討——自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として—— 心理学研究, **67**, 327-332.
- (Ueda, T. (1996). Self-acceptance as adaptively resigning the self to low self-evaluation. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 327-332.)
- 山本 眞理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. (1982). The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)